

Vol.11
2018年
秋・冬号

上町台地 今昔タイムズ

企画・編集：U-CoRoプロジェクト・ワーキング
(CEL弘本由香里、B-tran橋本護・小倉昌美)
http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html

発行：大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)
※U-CoRoはゆーころ(上町台地コミュニケーション・ルーム)
問合せ先：tel.06-6205-3518 (担当：CEL弘本)

「上町台地 今昔タイムズ」とは

わたしたちが暮らす「上町台地」。古代から今日まで絶えることなく、人々の営みが刻まれています。天災や政変や戦災も、著しい都市化も経験しました。時をさかのぼってみると、まちと暮らしの骨格が浮かび上がってきます。自然の恵みとリスクのとらえ方、人とまちの交わり方、次世代への伝え方…。過去と現在を行き来しながら、未来を考えるきっかけに、U-CoRoプロジェクト第2ステップでは、壁新聞「上町台地 今昔タイムズ」を制作いたします。

発掘！上町台地 ものづくり年表

【古代の層】

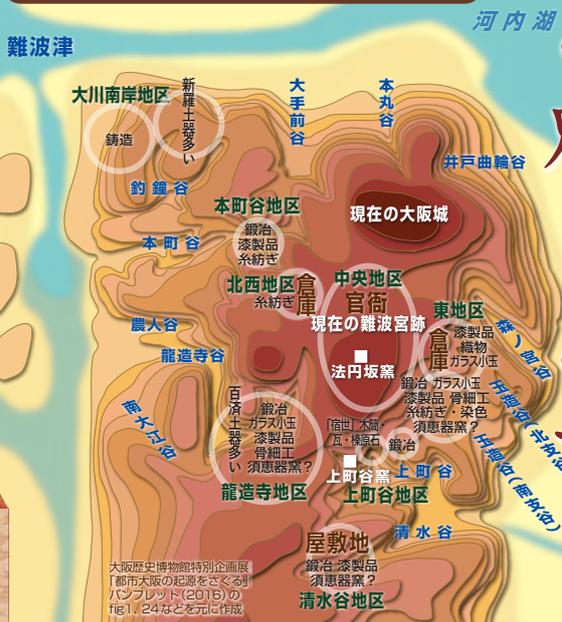
- 5世紀頃 法円坂に巨大倉庫群、難波堀江が整備され、難波津が設けられる
- ★法円坂窯や上町谷窯で須恵器が焼かれ、近傍でガラス小玉が生産される
- 593年 聖徳太子が四天王寺を難波の荒陵に建立したとされる(『日本書紀』)
- ★6世紀から7世紀前半、難波宮下層遺跡では、鍛冶やガラス小玉生産が行われる(須恵器や糸紡ぎも継続)
- 645年 乙巳(いっし)の變
- 650年頃 孝徳天皇により難波長柄豊碕宮(前期難波宮)造営開始
- 652年 難波宮完成
- 686年 火災で難波宮焼失
- 726年 聖武天皇により難波宮造営開始(後期難波宮)
- 744年 難波宮が一時的に首都となる
- ★7~8世紀の細工谷遺跡(天王寺区細工谷1丁目)で和同開珎の枝銭出土、鑄銭工場の可能性も
- 784年 長岡京遷都により難波宮の宮殿の建物は解体移築される

【中世~豊臣期の層】

- 1496年 蓮如が、現在の大坂城の場所に大坂坊舎の建立を始める
- 1499年 「天王寺は七千間在所」との記載(『大乗院寺社雑事記』)
- ★四天王寺の周辺には大規模な門前町が存在
- 1533年 本願寺が大坂に移転して大坂本願寺に
- 1540年頃 紀州粉河の寺島三郎右衛門が大坂で瓦焼業を始める(大坂築城の際には豊臣家の御用を務める)
- ★この頃、瓦を焼く「達磨窯」近畿地方で始まる
- 1570年 本願寺と織田信長の戦い始まる
- 1580年 本願寺が大坂を退き、寺内町は焼失
- 1583年 秀吉の大坂城下整備が上町台地で展開
- ★播州から瓦工を動員して瓦づくりを開始
- ★豊臣前期の達磨窯を発掘(中央区和泉町で9基)、桐文が彫られた木製瓦范や四天王寺の再建用敷磚なども出土
- 1594年 大坂城惣構工事開始/東横堀川開削
- 1614年 大坂冬の陣
- 1615年 大坂夏の陣/道頓堀川完成

都市考古学のフロンティアとしての大坂・上町台地。高度に開発された大都市の地面の下を、少しずつ丹念に探り続けてきた発掘調査の積み重ねが、今、文字通り埋もれていた都市大阪の原風景を自覚めさせ始めています。古墳時代に潜れば、上町台地の谷々に、最先端のものづくりの工房が集積する眺めに息を呑みます。近世・天下の台所を訪ねれば、技術と文化が連鎖する高密なものづくりの都であったことに気づかされます。未来のまちづくりの魁が垣間見えるようです。

6~7世紀前半の上町台地北部の古地理とものづくり

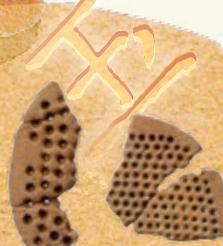


姿を現す まちづくりの魁・ものづくりの都が 足下に眠る "上町台地パレー"

難波宮前夜から天下の台所を経て大大阪とその後へ

古代の都にものづくりの谷があった

現代のシリコンバレーに勝るとも劣らない、「上町台地パレー」ともいうべき、ものづくりの谷が、6世紀から7世紀前半の上町台地の北端に生まれていました。難波津(なにわ)を擁し水陸交通の要衝として発展し、難波宮の誕生へと続くまちづくり・ものづくりは、上町台地に刻まれた天然の地形・水に恵まれた谷々から花開いていきました。都市の起源が、ものづくりとともにあることを物語っています。



玉づくり
上町台地の東地区(左図参照)ではガラス小玉をつくる鑄型(写真、5世紀)が出土。また5~6世紀の難波宮下層では、玉造谷南支谷や龍造寺谷でガラス小玉や未成品が発見されており、この地で長く製造されていたことがわかります。

陶器づくり
5世紀の上町谷窯(写真)や法円坂窯(左図参照)で硬質の土器である須恵器が焼かれており、難波宮下層の龍造寺谷や玉造谷南支谷でも須恵器が生産されていました。

物流と往來の拠点でもものづくりも盛んに

5世紀に上町台地北端部の法円坂に大型倉庫群が出現します。その北西に設けられた水上交通の要、難波津は、この頃から大陸との往來の拠点として発展します。ここから、当時最新の建築・土木・窯業・鍛冶などの文化や技術が日本各地へ広がっていき、同時に、上町台地の各所ではものづくりが盛んに行われました。



貨幣の鑄造

7~8世紀の細工谷遺跡(天王寺区)では古代の貨幣(和同開珎)の枝銭(えだぜに、写真)をはじめとする鑄造失敗品が多量に出土しています。その素材となる銅板なども見つかったり、この場所には鑄造に關する工房があったと推定されます。

発掘から知る、まちの広がりともものづくりの系譜

近年、都心部の発掘成果の蓄積によって、時代ともにも変わっていく土地の利用方法と、まちの広がりとの関係が具体的に見えてきました。豊臣期以降、大坂のまちが本格的に上町台地から西に広がっていくと、工房も市街の先に移る一方で、水運の便がある東横堀川沿いや上町台地西縁の地域にも生産の場が集積していきます。瓦屋遺跡では、型でつくる陶器や土人形、金属くずからの釉薬や顔料生産などの業種が関連して存在していました。また、中之島や堂島では、まず陶器づくりの窯や金属加工の工房などが現れ、やがて次第に蔵屋敷として居住の場となっていました。こうした都市でのものづくりは、小規模生産でもニーズの最先端をつかむことで、全国の大生産地をリードする役割を果たしていました。

門前町・寺内町と秀吉の大坂城下をつくった職人たちが

平安時代から中世へ、渡辺津(旧難波津)は天王寺・住吉大社や奈良・熊野への中継地として栄え、四天王寺の門前町には市が立ち、大坂本願寺の寺内町は全国に勢力を誇りました。そして豊臣期、大坂寺内町跡を中心に秀吉による大坂城築城とともに、渡辺津や四天王寺門前町を結ぶ城下町が築かれていきました。谷を埋め土地を広げ、「上町台地パレー」は城下町建設のフィードとなり、瓦づくりや鍛冶をはじめ、優れた職人たちが大坂・上町台地に引き寄せました。



出土した木製桐文の瓦范(瓦に文様をつける型、11.6×16.0cm) 写真提供：大阪文化財研究所

上町台地で焼かれた大坂城と城下町の瓦

中央区和泉町で発見された達磨窯は豊臣前期のもので、秀吉の大坂城や城下町建設のための瓦工房と推定されます。この遺跡からは、桐文が彫られた木製瓦范(がはん、写真)のほかにも四天王寺再建用の「天」の刻字がある三角形の敷磚(きせん)も見つかりました。



鍛冶による道具づくりは城下の建設に不可欠

豊臣前期とされる鍛冶炉が道修町1丁目に出ており、徳川初期の大坂城南部の工房でも多くの鍛冶炉が発見されています。これらはおそらく大坂城やその城下の建設や再建のために使われた鍛冶などの道具が生産されたところ。鍛冶は新しいまちづくりには不可欠な技術でした。



※1『和漢三才図会』(わかんさんさいずい)は1712(正徳2)年成立の絵入百科事典。著者の寺島良安の書斎・杏林堂は高津神社の北の南瓦屋町にあったと言われている。図版は国立国会図書館デジタルコレクションより

発掘！上町台地ものづくり年表

【近世・徳川期の層】

- 1620年 徳川秀忠が大坂城の再築に着工
- 1622年 長堀川完成
- 1630年 現在の中央区瓦屋町に寺島家が瓦土取場を与えられる
- 1636年 現在の島之内1丁目に大坂住友銅吹所が設けられる
- ★17世紀後半の陶器とともに墨つくりの油煙受皿を100以上発掘(中央区大手通2丁目)
- ★元禄期には「受銀鍛冶四十九名」などの刀鍛冶が大坂城西側に多数存在、また堺筋に硯屋や墨屋など集まる『難波丸』1696年刊)
- ★18世紀初めの町家跡から硯の未製品出土(中央区道修町2丁目)
- ★18世紀頃の井戸から黒茶碗の内窯破片や窯道具が出土(中央区島町2丁目)

1868年 大坂城炎上/開港場となり川口居留地できる/明治に改元

【近現代の層】

- 1869年 舎密局が開講
- ★近代先進農業だった綿産地の大阪で明治期に多くの紡績会社が創業
- 1870年 幕府の長崎製鉄所の機械や技術者を移し大阪造兵司を新設(のち大阪砲兵工廠)
- 1871年 造幣寮が開業
- 1874年 大阪〜神戸間に鉄道開通
- 1894年 日清戦争開戦
- 1897年 大阪市第一次区域拡張
- 1903年 第五回内国勲業博覧会を開催
- 1904年 日露戦争開戦
- 1925年 大阪市第二次区域拡張
- 1933年 地下鉄梅田・心斎橋間開通
- ★1940年頃、大阪砲兵工廠はアジア最大の規模を誇り、軍需以外に鑄鉄管や橋梁など民需も受注
- 1945年 大阪大空襲/終戦
- 1964年 新幹線東京・新大阪間開業
- 1970年 日本万国博覧

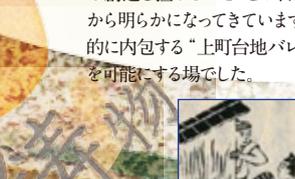
天下の台所を支えた技術と文化の 高密度な共創空間

大坂の陣で豊臣大坂城と城下町は灰塵に帰し、徳川大坂城の築城と城下町の復興へ。豊臣期の城下町を継承しながら、堀川の開削や新地の開拓など、商工業を支えるインフラが整えられ、海に向かって市街地が広がっていきます。まちなかでは、商業だけでなく、多彩な手工業・技術が連携しながら発展し、工業と都市文化の創造を担ってきたことが、近年の発掘資料等の分析から明らかになってきています。城下町のエッジを歴史的に内包する“上町台地バレー”は、関連業種の近接を可能にする場でした。



刀づくりは複合的な産業

刀づくりは大坂でも次第に盛んになりました。刀鍛冶が鋼から刀身を鍛え、それを研磨するのは研屋(ときや)の仕事。鑄(つば)や束(つか)や鞘(さや)なども、それぞれ専門職の手で整えられました。江戸時代、大坂城西側一帯は刀づくりに関連した職人が集まる地域でした。



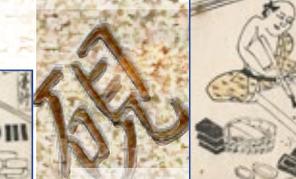
時代に応じ 鑄物の工房は市街地の外へ

大坂でも盛んだった鑄物生産。城下町が西に拡大するにしたがい、火などを使う工房はまちはすれに移動。さらに瓦屋町など上町台地西縁などにも移っていったようです。



墨つくりの油煙受皿が大量出土

江戸時代、大坂ではまちなかで盛んに墨が製造されていました。墨は油を燃やして出た煤(すす)を採取してつくりますが、その煤を取るための油煙受皿が大手通2丁目や内淡路町2丁目などで出土しています。



文房具は都市文化の必需品

17世紀から18世紀初にかけて、瓦町2丁目、道修町2丁目では、硯(すずり)とその材料や未成品が見つかります。島町1丁目でも硯の未成品が出土。当時の文房具として必需品だった墨、硯、筆などは上町台地や東横堀川周辺で制作・販売されていました。

住友銅吹所は日本最大の銅精錬所

江戸時代、日本は世界有数の銅産出国で輸出国でした。銅は大坂で精錬され、長崎から海外に送られました。現在の島之内1丁目一帯は、住友の銅吹所があった場所で、近年の発掘調査で約8基の炉跡が発見されています。水運の利便性がある東横堀川や長堀川付近には他にも多くの銅吹所がありましたが、住友銅吹所は日本最大規模を誇り、全国の生産量の3分の1を精錬したそうです。



精錬は不純物を取り除く作業。住友家が刊行した鉱山技術書『鉄銅図説』(19世紀前期)に描かれた「銅鑄を吹分る図」(左)と「銅鑄を吹分る図」(右)。国立国会図書館デジタルコレクションより

近年発掘された近世ものづくり工房跡



東横堀川近傍でも生産

内平野町や内淡路町では江戸時代の早い時期に陶器の生産が行われ、18世紀には島町2丁目黒茶碗が焼かれていたことが発掘調査で知られています。東横堀川に近い場所では市街地に取り込まれながらも火を使う産業が残っていたようです。

寺島家の広大な請地 瓦屋町一帯に関連業種が集積

中央区の瓦屋町一帯は江戸時代に瓦づくりの寺島家が幕府から屋敷地を与えられたところでした。寺島家は徳川による大坂城再建に貢献し、江戸城はもとより禁裏、寺社の瓦御用をはば独占するまでになりました。近年の瓦屋町遺跡の調査では、瓦のほかに陶器やミニチュア土製品、鑄物、ベンガラなどが江戸時代に生産されていたこと示す遺物が出土しています。瓦や陶器を焼くこと火を使う技術や原料などで関連する業種が近くで営まれる状況も明らかになってきています。

『撰津名所図会』(1796~98年)に描かれた南瓦屋町の瓦工房。大阪国立図書館デジタルアーカイブ

熱してつくる 赤色顔料ベンガラ

瓦屋町の遺跡では内面に酸化鉄の赤色顔料ベンガラが付着した焙烙(ほろく)が多数出土しており、製造工房があったようです。19世紀には高津御藏邸地でもベンガラがつくられていたことが、そこは舟運があり、市街の中心から離れたいたので、火を使い煙や臭いが出る産業に適した場所でした。

細工物づくりは まちなかの各所で

昔の小間物(こまもの)や遊戯具などの多くは動物の骨などを材料にした細工物でした。豊臣期には工房は市街の外縁部に多くありましたが、江戸時代には船場や上町の1帯に広がっていき、次第にまちなかの各所で営まれるようになりました。

大大阪から現代・未来の “上町台地バレー”へ

文献だけではとどろけない都市の真実の断片を、発掘資料の数々が物語ってくれます。近代に飛躍的な拡張を遂げた「大大阪」の経済・産業・まちづくりの基礎も、近世・大坂のまちなかに息づいていた様子がリアルに伝わってきます。そこに、今日只今、ここで生きている人々の記憶や想いを接続することで、未来の“上町台地バレー”の役割も浮かび上がってくるはずですよ。

ものづくりに馴染んだまちの路地で 藤田富美恵(重話作家)

今も古い町家が残る空堀界隈で、安政の頃から藤田家は晒蠟(さらろう)を生業にしていた。晒蠟の原料になる白蠟は、ハゼの実からできる生蠟(きろう)を陽で晒してつくります。作業場は、現在残る長屋(現在はアースベース・大大阪芸術劇場)の前の幅広い路地で、ここは上町台地の西裾できれいな水も出ました。職人さんたちがいた長屋は、昭和初期からは借家となりましたが、店子とは家族のような関係。そこで住人がいろいろなものをつくり生計を立てていました。この界隈は、きつものづくりに馴染んだ場所なのでしょう。最近では、小さな工房をもつ若い人も多いようです。

統合力を育む文化こそ、都市再生の「本質」 池永寛明(大阪ガス エネルギー・文化研究所長)

都市の中で金属加工や窯業、銅精錬から文房具づくりまでを高密度に行った江戸時代の大阪はまさに「ものづくり都市」。町人の知的水準は高く、それを育む文化や教育のシステムが整ったまちでした。その蓄積を背景に、明治初期に舎密局、造幣寮、砲兵工廠、工業系学校が次々につくられ、後の「工都大阪」の礎が築かれます。都市でのものづくりの多くは、消費者ニーズへの即応や新しい価値を生み出す試み。重要なのは、関連業種間の情報交換や、商工間の協力でそれを形にする力です。この統合力を育む文化こそ、大阪の都市再生の大きなヒントになるはずですよ。

ものづくりの技術が集積する地域の強み 吉村健一(旭進ガス器製作所)

上町台地の東へと広がった、ものづくりのまち生野区で、業務用のたこ焼き器、お好み焼き器等のガス器具を注文生産で設計・製造しています。顧客の要望を実現するため毎回苦しみますが、それはやり甲斐にも通じます。設計だけでなく素材選びからの工夫も必要で、その際、自分たちのノウハウや技術だけでなく、専門性が高く経験も豊富な周辺他社との協力や情報交換が役立ちます。そういうネットワークの存在がこの地域の強みで、技術の裏づけがあれば、下請け仕事を持たずとも勝負ができる。実際、最近ではネット等を使った全国との取引も増加しています。

※参考文献:『都市大阪の起源をさぐる』大阪歴史博物館 特別企画展パンフレット(2016年)、『大坂 豊臣と徳川の時代—近世都市の考古学』(大阪歴史博物館、大阪文化財研究所 高志書院 2015年)、『大阪遺跡—出土品・遺構は語る—』(大阪市文化財協会 創元社 2008年) / 杉本厚典『豊臣期から徳川期にかけての大坂の産業分布の変遷(予察)—発掘調査成果と『難波丸』、『難波丸網目』との比較から』(大阪歴史博物館研究紀要 第14号 2016年)ほか